

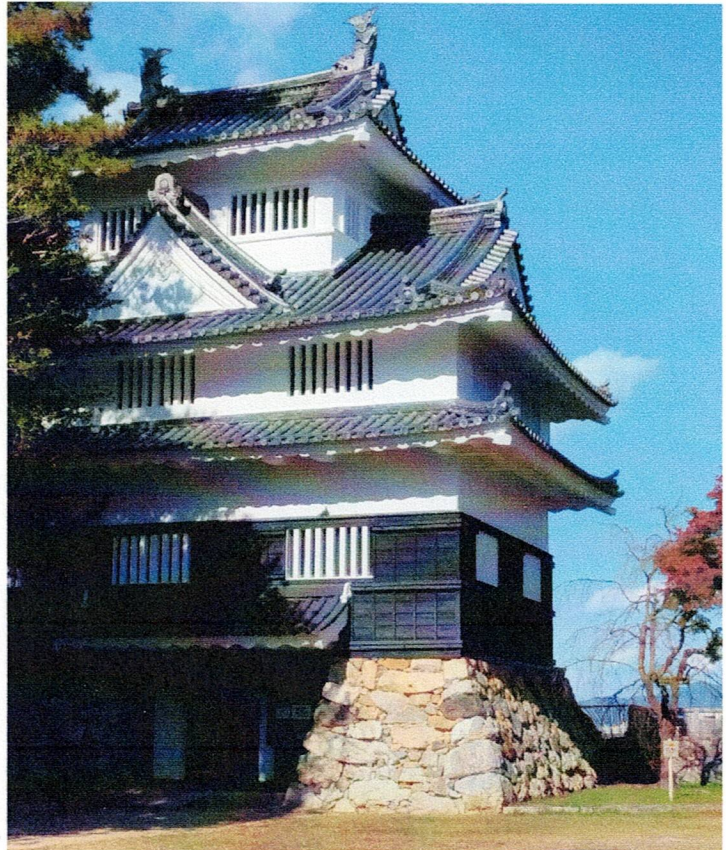
令和6年11月28日

JAにしみの年金友の会主催の「豊橋 吉田城址ウォーキング」に参加

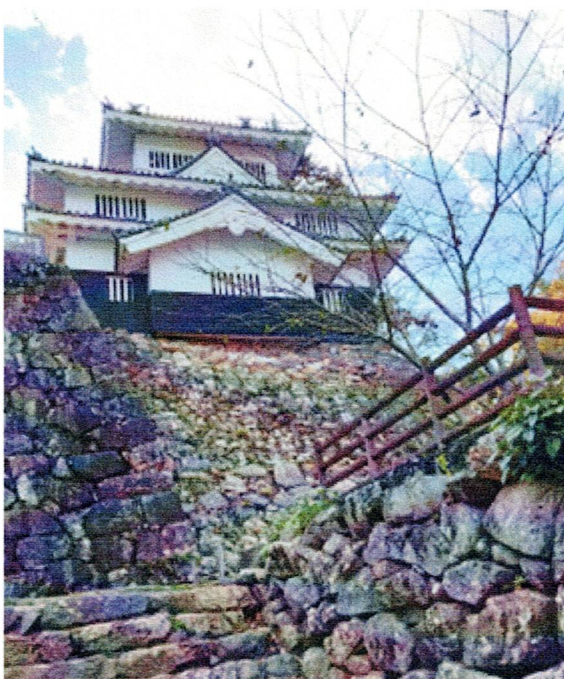
行程表

7時30分出発→休憩一宮 PA 8時半発

→豊橋吉田城址ウォーキング (2.5k 現地ガイド案内) 豊橋公園内 (豊橋市役所・吉田城址・豊川沿い) 12時10分発→吉田神社 12時30分発→13時着 蒲郡オレンジパーク (昼食) 14時発→14時20分着山本水産 (海産物買い物) 14時50分発→15時20分着えびせんべいとちくわの共和国 16時発→休憩一宮 PA 16時50分発→17時半着 <名神高速道路は順調に走行>



城の写真は吉田城址の鉄櫓 と石垣





豊橋公園全体と隣接する市役所の敷地が旧吉田城址です。

1564年には松平時代の家康公が、今川方の吉田城代小原鎮実を攻め、吉田城を攻略し、城主に酒井忠次をおきました。

酒井忠次は吉田城を改築し、新たに堀を掘ったことが発掘調査で明らかになっています。

その後、羽柴秀吉配下にあった池田輝政（照政）が、吉田城の城主となり、大城郭を改造しています。輝政時代の遺構には鉄櫓下の石垣があり、当時としては最新技術で積まれた石垣といわれています。

世界遺産となっている姫路城を池田輝政が築く前は、実は吉田城の城主だったのです。歴史に残る有名人たちが吉田城の城主だったということは、それだけ吉田城が戦乱の要であったということが言えます。

吉田城の石垣には、隅櫓の横から豊川方面への階段付近や本丸南側の入り口の石の中に、様々な印が彫られているものが確認できます。これらは「石垣刻印」と呼ばれ、築城工事を分担した大名や家臣の印といわれております。60個近くが確認されています。これは、名古屋城で使われた残石を転用したためと考えられています。

明治以後は旧日本軍の部隊もおかれ、一部その名残が残る等、様々な面で楽しむ事ができます。

<出典 愛知県の公式観光ガイドから>

## 豊橋公会堂



昭和6年(1931)建築の半球ドームと鷲がシンボルのロマネスク様式の建物で、国指定登録文化財。完成以来多くの催しが行われ、現在も講演会の開催や式典、舞踊大会、歌謡大会等幅広く利用されています。過去には太平洋戦争末期に市役所機能が移された時期や、豊橋中央公民館や市民窓口センターとして使用された時期もありました。

<出典 愛知県の公式観光ガイドから>

## 吉田城歴代の城主

- ① 永禄8年(1565) **酒井氏** (左衛門尉系) 酒井忠次 (ただつぐ) [城代]  
松平家康(後に「徳川」に改姓)の三河統一により、酒井忠次を吉田城に配置。
- ② 天正16年(1588) **酒井氏** (左衛門尉系) 酒井家次 (いえつぐ) [城代]  
忠次の隠居に伴い家督相続 家康の関東移封と時同じく、下総国臼井に移封
- ③ 天正18年(1590) **池田氏** 池田照政(てるまさ)(後に「輝政」に改名)

- 岐阜城より入封 播磨姫路に転封
- ④ 慶長6年(1601) **竹谷松平家** 松平家清(いえきよ)  
武蔵八幡山(現埼玉県児玉郡児玉町)から入封。吉田藩が成立。
- ⑤ 慶長15年(1610) 松平忠清(ただきよ)  
家清の嫡子、忠清が相続
- ⑥ 慶長17年(1612) **深溝松平家** 松平忠利(ただとし)  
深溝(現愛知県幸田町)より入封
- ⑦ 寛永9年(1632) **深溝松平家** 松平忠房(ただふさ)  
松平忠利の嫡男、忠房が相続 三河刈谷に転封
- ⑧ 寛永9年(1632) **水野家(忠重流)** 水野忠清(ただきよ)  
三河刈谷から入封 信濃松本へ転封。
- ⑨ 寛永19年(1642) **水野家(忠守流)** 水野忠善(ただよし)  
駿河田中(現静岡県藤枝市)から入封 三河岡崎へ転封。
- ⑩ 正保2年(1645) **小笠原家** 小笠原忠知(ただとも)  
豊後杵築(現大分県杵築市)から入封
- ⑪ 寛文3年(1663) **小笠原家** 小笠原長矩(ながのり)  
小笠原忠知の嫡男、長矩が相続
- ⑪ 延宝6年(1678) **小笠原家** 小笠原長祐(ながすけ)  
小笠原長矩の嫡男、長祐が相続
- ⑫ 元禄3年(1690) **小笠原家** 小笠原長重(ながしげ)  
小笠原長祐の弟、長重が相続 武蔵岩槻(現埼玉県さいたま市)に転封
- ⑬ 元禄10年(1697) **久世家** 久世重之(しげゆき)  
丹波亀山(現京都府亀岡市)から入封 下総関宿(現千葉県野田市)に転封
- ⑭ 宝永2年(1705) **牧野家** 牧野成春(なりはる)  
下総関宿(現千葉県野田市)から入封
- ⑮ 宝永4年(1707) **牧野家** 牧野成央(なりなか)  
牧野成春の子、成央が相続 日向延岡(現宮崎県延岡市)に転封
- ⑯ 正徳2年(1712) **大河内松平家** 松平信祝(のぶとき)  
下総古河(現茨城県古河市)から入封 遠江浜松へ転封
- ⑰ 享保14年(1729) **本庄松平家** 松平資訓(すけのり/すけくに)  
遠江浜松より入封 遠江浜松へ転封
- ⑱ 寛延2年(1749) **大河内松平家** 松平信復(のぶなお)  
遠江浜松より入封
- ⑲ 明和5年(1768) **大河内松平家** 松平信礼(のぶうや/のぶいや)  
信復の子、信礼が相続
- ⑳ 明和7年(1770) **大河内松平家** 松平信明(のぶあきら)  
信礼の子、信明が相続
- ㉑ 文化14年(1817) **大河内松平家** 松平信順(のぶより)  
信明の子、信順が相続 天保13年隠居
- ㉒ 天保13年(1842) **大河内松平家** 松平信宝(のぶたか)  
信順の子、信宝が家督相続
- ㉓ 弘化元年(1844) **大河内松平家** 松平信璋(のぶあき)

同族の松平信璋が養子に入り相続

② 嘉永 2 年 (1849) 大河内松平家 松平信古 (のぶひさ) (後に「大河内」に復姓)

越前鯖江藩主 間部詮勝の二男 詮信が養子に入り相続、信古に改名

明治 2 年(1869)版籍奉還により藩主から非世襲の藩知事に変わった事により、最後の藩主。

<出典 NPO 法人 吉田城復元築城をめざす会から>

\*\*\*こんなに多くの城主の変遷があったとは知らなかった。

## 手筒花火発祥 吉田神社



創建については諸説ありますが、旧社家の文書(天王御縁起)には天治元年(1124)当地で疫病が流行した際、牛頭天王(ごずてんのう)を勧請し疫病退散を祈願したのに始まるとあります。源頼朝の崇敬殊に篤かったとされ、治承 2 年(1178) 頼朝 雲谷普門寺に在宿の折、御祈願の為名代鈴木新十郎元利をして参拝せしめ、後文治 2 年(1186)石田次郎為久また代参とあり、其の時二日市に天王社(後に下天王・御輿休(みこしやすみ)天王社 今の新本町素盞鳴神社)を建立したとあります。

す。牧野古白の今橋城(吉田城)築城後は御城内天王社・牛頭天王社、天保 6 年に正一位の神階を賜った後は正一位吉田天王社と称しました。

今川義元 酒井忠次 池田輝政 又、徳川幕府成立後も歴代の吉田城主により社殿の造営や修補がなされ、寛文 2 年(1662)吉田城主小笠原忠知(ただとも)による上下両社殿の造立、及び元禄 13 年(1700)久世重之による拝殿・廊下等の造立をはじめ文久 2 年(1862)松平信古(のぶひさ)による修補まで、新造営 2 回、修理 14 回皆吉田城主の造営によります。又、鳥居や手水盤等、同じく城主の寄付にかかるものも多く残ります。現在の拝殿は明治 17 年に氏子八ヶ町の寄附により新造され、本殿は明治 25 年秋の台風による杉の倒木により大破したことから、翌 26 年同じく氏子に寄附を募り、名古屋古渡の匠大橋金次郎によって新造されたものであります。

<出典：吉田神社公式サイトから>

## 歴史ある吉田神社と豊橋祇園祭

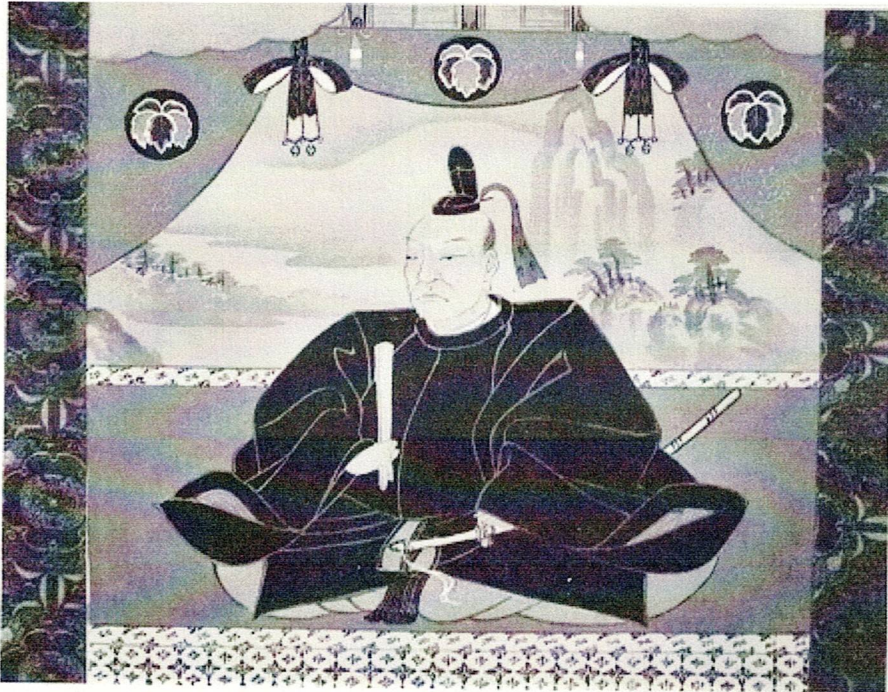
三河吉田(現：豊橋)の豊橋祇園祭の始まりは、鎌倉時代の初め頃であったとされています。疫病払いを祈願する祇園祭では、火の使用による悪霊放逐という考えが、やがて手筒花火の放揚に結びついたと推察されます。しかし、花火を打上げ始めた時期に関しては諸説あり、少なくとも戦国時代の鉄砲伝来(1543年)以降であったと考えられます。戦国時代の 1558 年、吉田城城代(今川義元の統治下)により手筒花火の奉納が執り行われ、氏子八ヶ町から手筒を放揚し、技を競い合ったという記録が社史に残されています。また、この頃には本町の路上で流星手筒や建物綱火(仕掛け花火の一種)などが小規模ながら打上げられていました。

時が進んで江戸時代には、平和の訪れとともに火薬の利用が多様化し、また、吉田藩主の保護を受けながら、本格的な花火大会へと成長していきました。このように、豊橋祇園祭の花火には日

本国内でも有数の歴史があり、江戸時代当時から、多くの文献にその盛大な祭りの様子が描かれています。同時に江戸時代には、徳川家康の出身地であった三河地方において、火薬の製造・貯蔵に関する規制が他藩に比べ寛大でした。こういった背景から、三河武士のあいだで火薬の利用が広まり、打ち上げ花火をあげる技術的な土台ができたと考えられています。

この、吉田神社への奉納花火から発達し、境内で余興として打上げていた仕掛け花火などが、のちに豊川の河川敷でも行われる様になりました。 <出典 豊橋祇園祭奉賛会サイトから>

## 藤堂高虎【出世餅の逸話】



高虎公座像 前田呉耕模写画（伊賀上野城蔵）

藤堂高虎が足輕のころ主君のもとを飛び出し、放浪中、三河国吉田宿（現在の愛知県豊橋市）へ差しかかったとき街道沿いに餅屋を見つけ、あまりの空腹に銭がないのに餅を注文し、ぺろりと平らげた。食べ終わってから、高虎は店の主人に無銭飲食であることを正直に白状して詫びた。

ところが店主は、「自慢の白餅をこれ程見事に召し上がられとは餅屋冥利に尽きます」と、無銭飲食をとがめるところか餅代どころか道中の路銀まで恵んでくれた。支払は出世してからでよいと言って許した。これに感激した高虎は、礼を言って立ち去った。数年の後、参勤交代の途中大名行列を止め、年老いた主人中西与左衛門に礼を述べて餅を家臣に振る舞ったという。

餅屋の恩を忘れないため高虎は、『白餅』を『城持ち』にかけて、『白もち3つ』を藤堂家の旗指物とした。紺地に丸餅は『城持ち』に、黒地に丸餅は、『石持ち』に通じる縁起を担いでいるという。

この話は、家老中川蔵人の日記に、「藩祖高山公ゆかり、三河吉田屋中西与左衛門方にて餅を喰うは習し也」とあるのが根拠としている。

<出典 写真と文 高虎公 遺訓二百箇ヶ条 八校公益法人伊賀文化産業協会 から>

参考 この話は伊勢国四日市で本陣森田屋に泊まったとき、玄関先の祝い用の餅を食べた。翌朝、無一文であることを聞いた宿の主は「御出世の暁にお支払いください」と言い、さらに永楽銭五貫文を差し出した。\*\*\*高虎の出世物語として講談に登場する。

<出典 高虎公 遺訓二百箇ヶ条 八校公益法人伊賀文化産業協会 から>